

協議会ニュース 51号

愛知県自然観察指導員連絡協議会 1995. 1



カニムシ探しに一生懸命！！



犬山市の善師野で行われた自然観察会の一コマです。白山神社の境内で、土中に生活する小動物を探しています。

カニムシは、カニをそのまま小さくしたような形をしています。識別が容易なため、まずはハンドソーティングの第一目標です。3ミリほどの大きさなのですが、子どもたちはすぐに発見のベテランになります。「ぼくは2匹！」「わたしは3匹も！」・・・でも観察が終わったら、そっと土にもどしました。(H6. 5)





★表紙の写真のその後★

小動物は解剖顕微鏡でも観察します。10倍のレンズを透して見た土壌生物の形はまさに精密モデルです。虫たちはでっかい恐竜になりました。ピントが合ったその瞬間に、こわい時代に引き込まれます。さて、自分はガリバーの世界の主人公になって大活躍。

ほっとしたところで、検索の図と比べながら、仲間分けをしていきました。



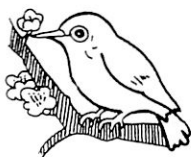
簡単なウッドクラフト ⑭

名古屋支部 椿 幹雄

ササやタケを利用して、うぐいす笛を作ってみませんか？

I. 準備品（鶯笛1個分）

- 1) 竹（直径15mm・長さ60mm）
胴体
- 2) 細い竹か笹（直径7mm・長さ60mm）吹き口
- 3) ナイフ
- 4) 三ツ目錐
- 5) 瞬間接着剤
- 6) 紙やすり
- 7) プラスドライバー（先の直径9mm程の物）



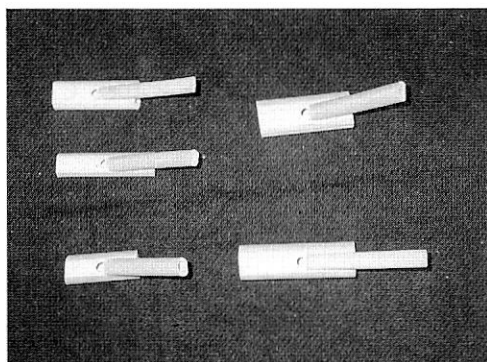
5) 吹き口用の竹か笹を30度の角度に削る。

6) 胴体用の穴に吹き口を接着剤でとめる。

III. 竹の太さと長さを変えることによってハト笛、カッコウ笛、フクロウ笛になります。

II. 作り方

- 1) 胴体用の竹の上の部分を0.2mmぐらいの厚さまでナイフで削る。
- 2) 60mmの胴体の中心に錐で穴をあける。
- 3) ドライバーで穴を大きくする。
- 4) 紙やすりで穴をきれいにする。





河川の性格と管理について



(講座研修から)

佐藤国彦

この7月に行われた講座研修会の結果から河川に関する問題点のいくつかを思いつくままと整理してみました。

※ ※ ※ ※ ※

1 河川とは

河川について、すぐ思いつくのは「水」の流れる場所ということです。水は人間生活にとって不可欠なものであり、古くから河を流れる水の利用と洪水の制御には苦労してきました。

また、河川は生物の住む場所でもあります。人はその一部を食料資源として利用したりしましたし、ホテルなどは観賞の対象として楽しんできたでしょう。

そして、河の持つ3つ目の機能として、河には土砂を運搬するという機能があります。河川の作用として、浸食・運搬・堆積があることは、教科書でも習ったことですが、川の管理上これらは人間にとって都合の悪いものとしてのみ考えられている気がします。

河川は、水と土砂を運ぶ結果として、その流路は始終変化するのが本来の性格と考えられます。ところが、一定の場所に定住して生活する人間にとってこれも不都合なことであり、河川が常に同じ場所を流れるように様々な工夫をしてきました。

河川と人間が仲良く付き合っていくためには、こうした川の持つ作用や性格をうまく保全していく必要がありますが、今までは利用するものは最大限に利用し、不都合

な機能は無理にでも押え込もうとしてきました。そのため、河と人間の関係はあまりうまくいかず、多くの問題が現れてきているように思えます、

表1は、河の最大の流量と最小の流量の比である河況係数を比較したものです。河況係数が小さいことは洪水時と平常時の流量の差が少ないことを意味します。日本の川は、流域面積が小さく、川床の傾斜が強いため、河況係数が大きく、川の水は短時間で流れ去り、大雨のときはすぐに増水する特徴を持っています。



2 河川の管理

河川の管理は、明治29年に公布された(その後何回か改正されたが)「河川法」に基づき行われています。河川法の目的は、流水の正常な機能(流量)の維持とされています。そのため、河川の洪水を防ぐとともに、一定の流量(基準:その河川の流域面積 100km²当り 1 m³/秒)を維持するように施策が講じられています。そして、河川の国土保全上の重要性により水系ごとに「一級河川」「二級河川」に区分され、それぞれ建設省、都道府県が指定し管理しています。(一級河川でも県が国の委託を受けて管理している部分もあります)また、小さな川では、「準用河川」として市町村が河川法を準用する形で管理しています。

しかし、河川を流れる水を適正に管理するためには、「森林法」や「砂防法」による管理も必要で、これらに河川法を加えた

ものを治水3法と言っていますが、それぞれの所管する役所が異なるため、総合的な運用が必ずしもうまくいっていない面があります。これを補うため、総合治水事業として関係機関が協議して治水対策を行うような事業もできています。

また、雨水の流れを考えるとわかるように、河川だけの保全整備では、水の管理は十分とは言えません。流域内の開発によって、河川へ流れ込む水の量や流入状況も変わってきますが、河川管理者としては、こうした土地開発に対して、貯水池を設けるように指導すること位しか事実上できないのも問題と言えましょう。

3 土地利用と河川

表2の日本の土地利用の推移を見ると、1965年から1985年の20年間（少し古いですが）に、都市地域と道路を合わせて100万ha近く増加し、農地・原野・森林がそれだけ減っています。経済成長の著しい時代であったためその変化は著しいものですが、注目すべきは減っている農地や林地は、雨が降った時にその水を受け止めて貯水する機能を有する場所であり、一方増加している都市地域や道路は、降った雨をすぐに流してしまう場所であることです。

そうした水の流出形態の変化は川に大きな負担を与えます。森林や水田の多い場所であれば、降った雨は時間をかけて川へ流れ出しますが、都市という不透水部分の多い場所では、降った雨は急速に川へ流出していきます。

このため、大雨が降ると河川の流量は大幅にかつ急速に増加して洪水になり易い反

面、通常は非常に水の少ない都市河川タイプの河川となります。

この様子を表3の東京都の例で見ると、昭和43年から52年の10年間に、降雨量のうち地表面を流出する水は40%から46%に増え、その分蒸散したり地下へ浸透する水は少なくなっています。（湧水地の減少という傾向にも現れています。）

都市化に伴って、河川がどのように変化するかをまとめると、下の枠内ようになります。このような傾向は、都市河川に限らず、地域開発に伴って日本の河川のほとんどに大なり小なり現れつつある現象といえるでしょう。これでは、河はより高い堤防と護岸に囲まれた存在に変わっていくという宿命から逃れられないでしょう。

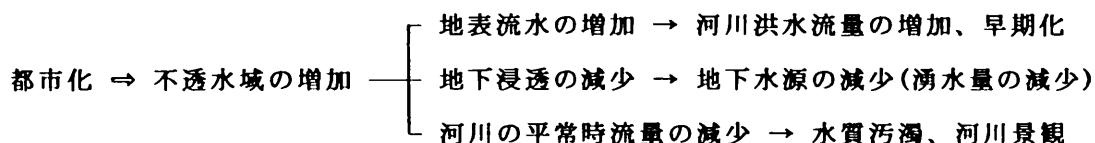
表4は、水害の被害額の推移です。水害の程度は、降雨量の多少によって異なるため、年による変動が大きいのですが、この表を見る限り、いくら河川整備の努力が続けられても、私たちの生活が水害から無縁になることはこれからもないように思われます。



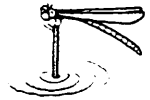
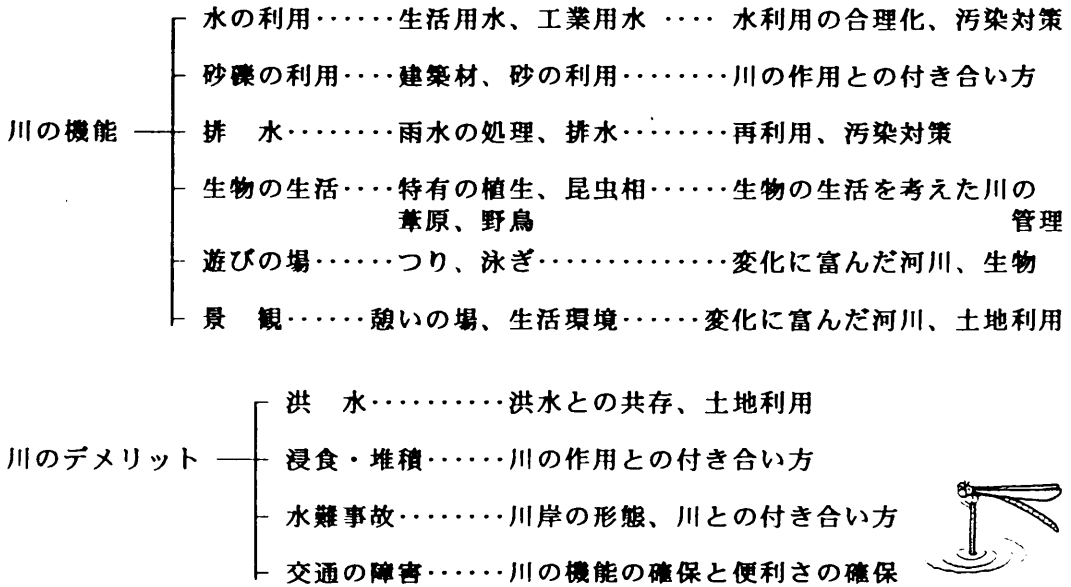
4 私たちの生活と河川

森林の機能については、自然観察会のテーマとしてもよく取り上げられますが、河川の機能をまとめたものがないので、思いつくままに整理してみたのが次ページの枠内です。人間生活にとってのデメリットもまとめてみました。

これを見てみると、河川は私たちの生活にとって、利水・排水等の場として必要不可欠なものであるとともに、生活空間の障害・災害をもたらすものとして困った存在



川と私たちの生活



でもあることがわかります。

これに対して、私たちの祖先は、水の利用に関しては、ダム・用水路等を作って使えるだけの水を使用し、河のデメリットに対しては、堤防を高くしたり河を直線的にして早く流すように、土木的に対処してきました。経済的に価値のない生物の生活の場、遊びの場、景観については、それが日常生活には大切なものであらうと、重視されませんでした。これを河川の立場から見れば、水はいいように使われて汚され、その形はいいように変えられて、全く人間の都合の良いようにされてきたと言えましょう。

この結果、河は人工物に囲まれ、その自浄作用は少なくなり、生物相は大きく変化して、河はその個性を失ってきました。

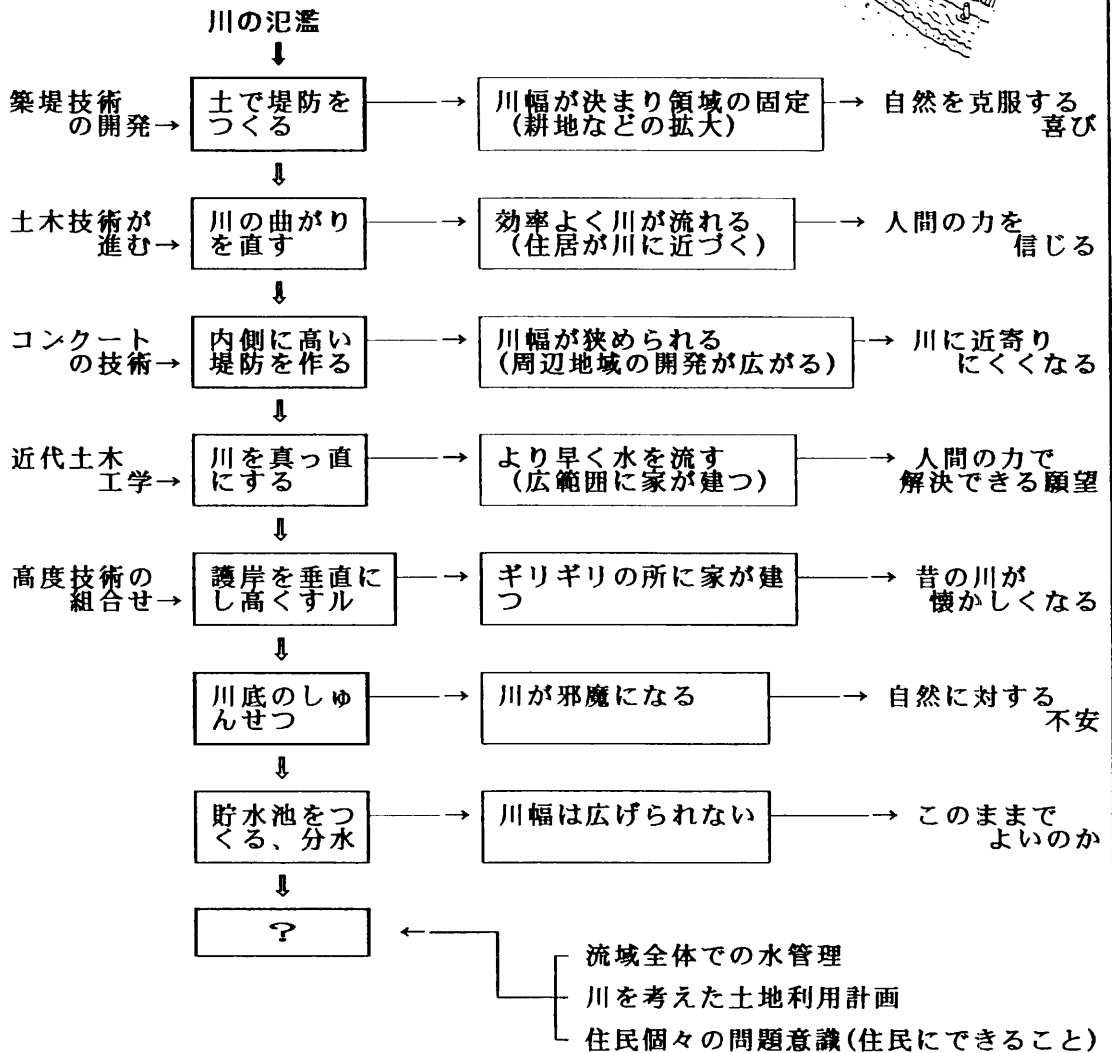
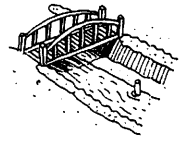
私たち人間と河との係わりの経過を一つの流れとして示すと、次ページの図のようになると考えられます。

河の氾濫に悩まされていた私たちの祖先は堤防を作ることによって、自分たちの生活の場を確保できるようになりました。始

めのうちは河を押さえ込むのではなく霞堤のように大水の時は堤外に水が流れ出るようなものでしたが、土木技術の発達によって河の水が外へ出ないような強固なものを作るようになり、河のすぐ近くまで人が住めるようになりました。人は、自分たちの技術力の大きさを過信するようになり、一方河と人との係わりが薄くなっていきました。河の外側を人間が自由に使うことによって、むしろ河が邪魔な存在とさえなってきました。そして、今では洪水対策に河だけでは対応できなくなり、別に貯水池等を設ける必要も生じてきました。

最近では、こうしたことに気が付いて、河川の親水性を確保したり、自然工法として、自然に近い河川改修などが一部で行われるようになりました。しかし、河の生態系の保全や水系全体の水管理を考えるには至ってはいません。多くの生物がいてこそ生きた河であり、変化に富んだ景観があってこそ個性のある河となります。さらに、雨の水や私たちが使用した後の排水もやがては河へ流れ込むものである限り、河以外

〔河川管理の流れと地域の開発〕



※ 押田編「都市の水循環」のモデルから改作

の土地利用や水の使い方まで考えた河川管理を行わなければ、いつまでも河は言うことを聞かない排水路のままでしょう。

また、河川の大きな作用である浸食・土砂の運搬・堆積については、その進行を遅くする昔ながらの方法から抜けられないでいます。このことが、一方で海岸浸食の増加という事態を招いてもあります。河は土石も流れる場所として、河との付き合い方そ

のものを改めて考え直す必要があるように思われます。

このように提案はしても、実際にこれを実現することは至難なことでしょう。私たちの価値観に係わる問題であり、痛みを覚悟しないでは対処できない問題と思えるからです。

自然観察会などで、我々指導員はどのようにこの問題を扱うと良いのでしょうか。

表1 河況係数

(単位: m^3/s)

	最大 流量 a	最小 流量 b	川況係数 a / b		最大 流量 a	最小 流量 b	川況係数 a / b
利根川	10,208	11	928	吉野川	10,126	2	5,063
木曽川	5,312	61	871	ドナウ川	2,100	125	17

表2 日本の土地利用状況

(単位: 万 ha・%)

区分	1965年 a	1975年	1985年 b	b - a
都市部	85 (2.5)	122 (3.6)	148 (4.4)	65
道路	82 (2.4)	97 (2.9)	112 (3.3)	30
農地	643 (19.0)	575 (17.1)	611 (18.1)	- 32
原野	64 (1.9)	41 (1.2)	26 (0.8)	- 38
森林	2,516 (74.2)	2,518 (74.1)	2,482 (73.4)	- 34
計	3,390 (100)	3,353 (100)	3,379 (100)	

() 内は構成比

表3 東京における水循環の変化

(単位: $\text{km}^3/\text{日}$)

区分	昭和43年 a	昭和52年 b	b - a
表面流出量	1,567 (40%)	1,808 (46%)	241
蒸発散量	1,436 (36%)	1,319 (33%)	Δ 117
地下浸透量	961 (24%)	837 (21%)	Δ 124
計	3,964	3,964	0
被覆率	45%(区部60%)	52%(区部65%)	

。総量は、都内の日平均雨量

資料
「都市の雨水を考える」から作成

(元資料: 東京都)

表4 水害被害額の推移

(単位: 億円)

年	昭 58	昭 59	昭 60	昭 61	昭 62	昭 63	平 1	平 2
愛知県	166	14	43	3	30	46	83	83
全 国	8,756	2,253	6,009	7,480	5,163	5,327	6,312	9,969

資料: 水害統計 (建設省)

表5 上水道の1人1日給水量

(単位: ℓ)

年度	昭 40	昭 50	昭 60	平 1
名古屋市	348	474	402	403
東京都	395	448	425	427
京都府	317	435	461	489
千葉県	228	292	309	321





自然観察あれこれ

鈴木 武 (名古屋支部)

伝達の方法について

「動植物名」及びその「和名の由来」などの説明の際には、「文字」として示すために、手間はかかるが、「フィリップ」を作っておいて、視覚にも訴えるようにしたい。

和名などは観察のための一手段であり、一番頭に入りやすい情報でもあります。聴覚よりする情報は「聞く耳」をもったヒトでも演者の言葉のナマリなどにより正確には聞き取れないこともあります。

たとえ情報量は少なくとも、正確に伝えるためには色々な手段を使用したい。

和名の由来などの説明

外国語のスペルを覚える方法として、その語源を知るのも良い方法とされます。同様に、「和名の由来」を説明すると、非常に興味深く聴く「ヒト」があります。

例えば、

- 「ヘビノボラズ」はそのまま、形態より説明すれば意味が通る。
- 「コナラ」に対し大楷はないが、「ミズナラ」の標本と比較させれば、よくその和名の由来が説明できる。
- 「ヤハズソウ」は矢筈の実物を見た「ヒト」は少ない。「ナンバンキセル」はオランダ人が使用していたマドロスパイプに由来しているが、今ではパイプも煙管も使用している「ヒト」が少ない。従って、せめて写真等で「矢」「マドロスパイプ」を見せれたらと思う。

同様に、次のような骨董品の写真を探しています。

「こうがい」⇒コウガイビル、コウガイゼキショウ

「巴」⇒トモエソウ

「うまのすず」⇒ウマノスズクサ

「面高」の図柄 ⇒オモダカ

「竹篋」⇒ウシノシッペイ

「梅鉢」のついた什器 ⇒ウメバチソウ

「タンポ」又は「タンポヤリ」⇒タンポポ

「アブミ」⇒ムサシアブミ

「靱」⇒ウツボグサ

「鳴子」⇒ナルコユリ

「桧扇」⇒ヒオウギアヤメ

「山姥の面」⇒ウバユリ

「雅楽に使う鳥兜」⇒ヤマトリカブト

ルーペの活用

顕微鏡を現地まで持参するのは重いので20~30倍位のルーペを使って拡大して見せると、子供も大人にも新しい世界が開けてきます。

その例としては、

- 「アレチヌスビトハキ」の付着毛は、マジックテープそっくりだと喜ばれる。
- 「クスノキ」「カクレミノ」の葉を透過光で見ると、網脈の作る網目と明点（精油粒）が見える。今ならフラクタル構造として喜ばれそうだ。
- 「ダニ」「大型原虫」「ワムシ」などの動くものを見せる。
- 「ヤブムラサキ」の葉の裏の毛は、オバキューの頭の毛を連想させる。「ノアザミ」の葉縁の刺はいかにも痛そうに見える。

二度目以降の観察会

一カ所にとどまって詳しい観察の指導をしたいということです。

大学に進学するための受験勉強をしなかった専門学校生を教えて感ずることは、「中学及び高校の理科教育の成果が生徒に徹底していないこと」です。指導員である理科の教員は理解させるために非常な努力をしておられることと信じます。しかし、もしかしたら進学を希望しない生徒は「お客さま」扱いで進級させてしまったのではないのでしょうか？

自然界には面白い材料が山ほど転がっているのに、見捨てて置く手はありません。これを材料として自然観察を行ったら如何でしょうか。初めて参加する方は兎も角、再度参加された方にはレベルアップして短時間で実施できる「生物実験」を実施したいと思います。これにより自然に興味を持ってもらうことができることができれば、自然保護の普及にもつながることとされます。

ビジターセンター

国立公園には殆どビジターセンターが設置されていて、そのアウトラインを写真やジオラマで見て、後に現地に赴き自然観察をするとより親しみを感じ、再度訪れたくなります。

近くには豊田市自然観察の森があり、岐阜県博物館等もその役割を果たしていますが、愛知県立又は名古屋市立のものはありません。

前任地である札幌市では、財政規模が小さいにもかかわらず、「札幌市北方自然教育園」として白川小学校の旧校舎と旧校地を利用して、昭和51年に設置されました。

名古屋市では、校外教育施設が稲武町や中津川市などにありますが、東海地区特有の植物を集め、また特有な昆虫の成育環境

を整備した自然園を作るとともに、身近に利用できる社会教育施設を作りたいと思います。

海上の森に「県立自然史博物館」も必要ですし、名古屋市内では猪高緑地が「自然教育園」の候補地の一つだと思います。教育行政に詳しい方、良い推進方法がないか教えてください。



会員の動き

【加入】

- ・井上恵子（知多支部）

〒479 常滑市新浜町 4-115

☎ 0569-35-3655



【脱退】

- ・井手上明弘（名古屋支部）

（鹿児島県へ転出）

【住所変更・表示変更】

- ・桑山貞徳（尾張支部）旧姓「加藤」

〒475 岩倉市八剣町淵ノ上 4

☎ 0587-66-2984

- ・江原則子（尾張支部）旧姓「藤田」

〒440 瀬戸市八幡台 4-4-401

☎ 0561-87-0572

- ・中野 修（知多支部）

〒475 半田市新池町 1-201-5

最近考えること

川辺泰正（西三河支部）

本当のアウトドアライフとは

余暇時間が増加し、アウトドアライフブームの昨今である。カラフルなテント、用具類や手引書が店頭に並ぶようになった。川原でバーベキューを楽しむ人々、山野を駆けるRV。かつて、苦勞してテントを背負い、水を汲み薪を集め、キャンプに興じた頃とは隔世の感がある。休日のオートキャンプ場は数カ月前から予約で一杯。車には生活用具が満載されている。以前は、女性が敬遠したキャンプ場もシャワーや水洗トイレが完備されて、快適性が増した。本当に便利な時代になったものだ。

現代のアウトドアライフは、厳しい野外生活を通して自然と接し、人間性を回復するという本来の目的より、都会生活の延長上のレジャーという感が強い。こうした生活スタイルを全て否定するものではないが、金をかけずに自然を満喫できることこそボストリゾートの本命だと思う。森を歩く子供たちは生き生きとしている。そこには、便利さや快適さは必要だろうか。

学校生活も、生活科の導入など野外活動重視の方向にあり、自然のフィールドは今後も整備され、そうした環境の中で多少とも自然の偉大さ、厳しさを学び、自然の恵みを楽しむ機会が増えるだろう。

しかし、キャンプ場で洗剤を使えば河川は汚染されるように、自然との本当の接し方やマナーについて、これからみんなで考えていく必要があると思う。

メダカのいなくなる日

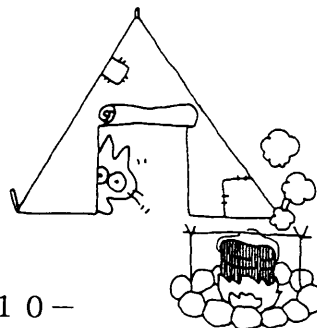
休日に小学校5年生と2年生の娘の学習課題である理科と生活科の単元「メダカの

観察」と「川の生き物」を調べるため、郊外に出かけた。幼い頃遊んだ小川に久しぶりに行ってみると、護岸整備が進み、人工的な川となっしまい、周囲の田園は高層住宅や駐車場に一変していた。川に魚影はない。

あきらめて少し奥地に足を伸ばした。緑の田園風景に期待して、川や水路を探しても、殆ど河川改修されていて、メダカの姿は見えない。メダカに似たカダヤシの姿だけを見かけただけである。子供たちはがっかりした。

都市化の進展や河川改修、農薬の使用などにより、メダカの生育に適した環境がいつの間にか失われていたのだ。ありふれた小川の風景の喪失とともに、メダカもペットショップか水族館でしか見えなくなる日もさほど遠くないのかもしれない。

一見美しい風景の背後にしのびよる生態系の微妙な変化を見落としてはならない。宇宙へ飛んだメダカのふるさとが危うくなっているのが現状である。県内においても早急にメダカの分布実態を調べる必要がありはしないだろうか。



❖ ❖ 環境教育学会に参加して ❖ ❖

名古屋市 朱雀英八郎

環境教育学会の第5回総会が、5月14・15日、神戸、甲南大学でなされ参加した。愛知からは会員の野田さん、愛教大の金森さん、寺本さん、中学・高校の教員のみなさんの参加があった。（2年前には愛知で開催されている。）

私も「青年たちと社会教育、環境教育実践」として、青年の家で行った活動を発表、紹介した。スライドを用意せず、何をポイントにしているのかわからぬままだったが、青年を集めて行っていること、（ねらい・成果などを聞かれ）環境問題を受けとめ、何人かはリーダーになり、仲間として活動していることを報告した。

講演は「文明と健康環境」中川米造氏

サテライトシンポは、学校教育、食と農、環境問題の根本問題、幼児期の環境教育など

ロビーの展示も盛りだくさんで、夜の懇親会もいろいろな人と話すことができて会費を払っただけの価値はあった。

＊環境教育とは何か。

「理科社会に含まれる」「特に言わなくても」の不要論に近い主張から、

「環境教育こそ本当の教育だ」との指摘は、今の教育批判でもある。

「環境を考えると将来が暗くなる」だからこそ必要だ、幼児のときからすべき、など議論になった。

環境問題も、地球環境からゴミのリサイクルまでである中で、環境教育は多岐にわたり、テーマ発表も様々であった。

（関心のある方は連絡をください。）

なんじやもんじや通信 94.11.16 （名古屋支部）より

11/3 シリーズ観察会「川の自然観察」 場所 守山区竜泉寺から庄内川川原

指導員 浅井 参加者 朱雀、堀田、垣見、岩崎昇




庄内川の河原で帯状植物群落調査をした。オギ、セイタカアワダチソウ、キクイモ、ヌスビトハギなどの高茎植物が、勢力を競っていた。植物の社会では、光取り競争が行われており、草丈が高くなるほどその競争に勝ち、生き残ることができ、繁栄が約束される。ところがこの河原では、高茎化する植物が単一群落をつくるのではなく、逆に高茎化するにしたがって他の動植物に利用されるのである。たとえば、草丈3mにもなるセイタカアワダチソウやキクイモなどの広葉型植物は、クズ、ツルマメ、ヘクソカズラ、ネナシカズラなどのつる植物にまきつかれ、また、ノイバラ、エビヅルなどのとげ植物によじ登られて、支持棒のごとく様相を呈している。つる植物やとげ植物は、やがて高茎植物をたおし、日当たりのよい場所を独占してゆく。また、比較的つる植物やとげ植物に強いオギも、茎の髄鞘をみると、ところどころ赤変しており、幼虫の被害ににあっている。

植物群落の社会では、巨大化した個体は、それを取りまく生物に住みかや食物を提供している。人の手が加えられてない社会では、一種の生物だけが繁栄してゆくのではなく、多様な生物が生命共同体をつくって、生きてゆくのだなあと感じた。

♠ ♠ 新人指導員研修の中間報告 ♠ ♠

普及部 篠田 陽作

今年から普及部の新しい事業として始めた新人研修，これは新人研修の名前ではあるが，もう一度基礎を勉強しようと思う指導員のための基礎講座として今年から始まった試みです。しかし，準備不足と広報の不足のために，皆様に知られていないままに始まってしまいました。それでも皆様のご協力で前半5回が無事終了しましたので中間報告をいたします。

	テーマ	実施場所	参加者
1	冬芽の基礎その1	大高緑地公園 1月	16名
2	冬芽の基礎その2	大高緑地公園 2月	15名
3	周伊勢湾要素その1	大森湿地 3月	10名
4	土壌生物	東山八事裏山 4月	7名
5	干潟の生物	市野鳥館前 5月	10名
			合計58名

以上のような結果です。新人と指導員の割合は約半々です。しかし，新人の参加者の中には，大阪・豊橋・瀬戸・犬山など遠くからの人もあり，その熱意には感心させられました。後半も雑木林の昆虫，ムササビ，周伊勢湾要素その2，ブナ科の木の実，など予定しています。ぜひご参加ください。なお来年もこの企画はさらにパワーアップして続けて行きたいと思います。ご希望などありましたら，普及部長の東か篠田，または事務局佐藤までお知らせください。



ものみ山自然観察会からのお知らせ

海上（かいしょ）の森の自然観察会においでください。四季を通じ，みなさん楽しんでいただけます。毎月第1土曜日，第2・4水曜日，第3金曜日，第4日曜日。弁当・水筒持参で，午前10時（第1土曜日は午後1時40分）に愛知環状鉄道山口駅に集合。日本野鳥の会愛知県支部主催の探鳥会は，毎月第2日曜日。午前9時に山口駅に集合。（午前中のみ）

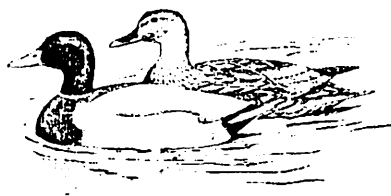
観察会のお問い合わせは「ものみ山自然観察会」TEL0561(83)9438, (84)2953

スナック菓子を食べるイワナ

パークボランティア 篠田 陽作

7月27日パークボランティア活動のため上高地へ、前回7月10日のときより、草木の花の数がすこし減った感じがする。そのかわり木々の緑は更に美しさを増したようです。さっそく東京からみえた親子四人を明神池までご案内することになりました。上の女の子が小学3年生、下の男の子が一年生です。さっそく梓川右岸の木道を明神池へ進んで行くと、岳沢の方から流れ込む支流の橋のしたで、マガモがエサをねだってクークーと鳴いています。さっそく子供さんがスナック菓子を投げ与えると、うばいあって食べています。その時です水面下の水草の中からスーッとイワナが出てきて、パクッとスナック菓子を食べて行きました。私は思わずアッと叫んでしまいました。マガモだけでも心配なのに、イワナまでも餌付けされたのかと、心が痛みました。私たちパークボランティアが注意をしなければいけないのですが、喜んでいる子供さんを見ると、強くは言えなくて、それでも男の子にあまりエサをあげないでね！と注意すると、ナゼと不思議そうに聞き返しました。私は心のなかでシメタと思いました。子供のナゼに答えることがそのまま自然解説になるからです。この鳥はマガモと言って、野性のカモの仲間は何百年いや何千年も自然の中で水草などのエサを食べて生きてきたのです。だから突然人間の食べるものを食べさせるとおなかをこわしたり、体の調子が

悪くなったりするからね、君がもし牛や豚のエサを食べたらきっと、おなかをこわしたり、具合が悪くなるよ、だから動物園などでも



マガモ

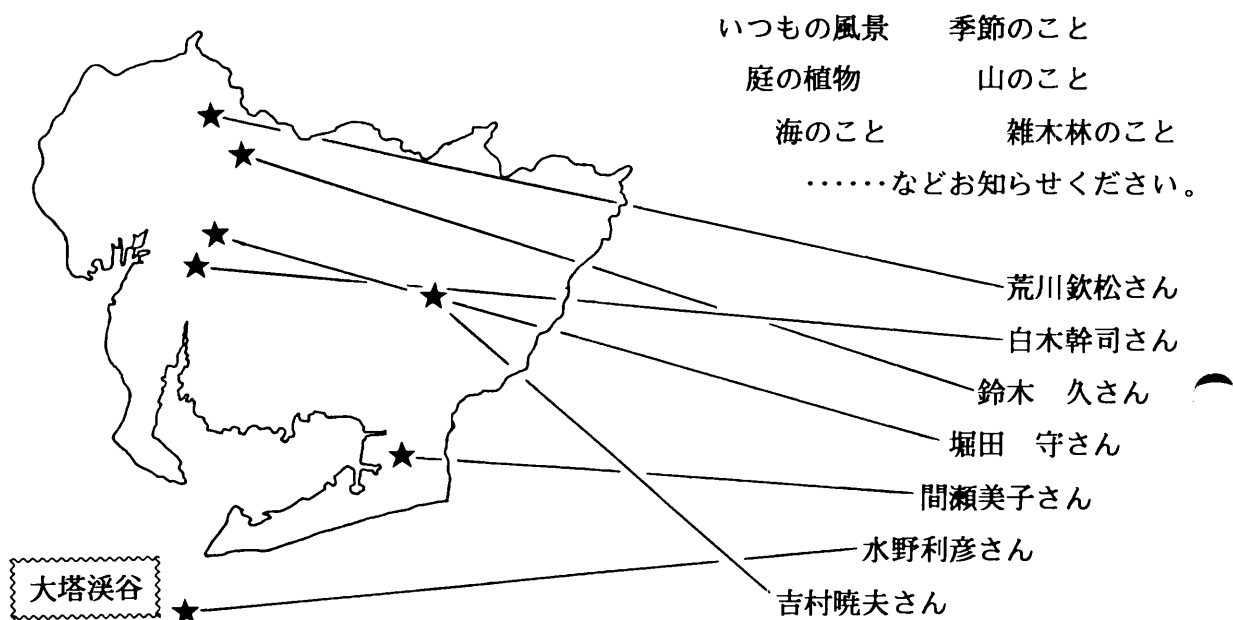
エサを与えないでください。と書いて

ありますね、だからエサをあげる

ことが動物を可愛がることにはならないんだよ。男の子はウン判ったよ、これからは自然の動物にはエサをあげないよ、と判ってくれました。これで彼は自然に対する接し方を一つマスターしてくれました。どうか夏休みに上高地へ来られたお父さん、お母さんこの美しい上高地の自然の中で、自然の素晴らしさや大切なことを話し合ってください。お子様に自然の素晴らしさを少しでも理解していただけたら素敵な夏休みの思い出になると思います。どうぞ楽しい夏休みを美しい上高地で、心行くまで楽しんで下さい。『美しい自然が自然のままでいつまでも』



私の自然



鳳来寺山周辺の自然から

東海市 吉村暁夫

今年も8月17日がやってきた。19年前にグループではじめた鳳来寺山周辺の地質調査の「夏の調査」定例日だ。この日から1週間泊まり込みで、昼はフィールド調査、夜はグループごとの調査報告・まとめを行っている。この辺りは、新第三紀中新世の地層と、火山岩類が分布している。調査の目的は、これらの地層・岩石の成因の解明なのだが、私個人にはほかにも目的というか楽しみがある。それは、調査はたいてい沢を登りつめ尾根を歩くので、その途中、いろいろな動植物に出会えることだ。たとえば今年の調査では、斜面を埋め尽くすようにキツネノカミソリが咲いていたり、フシグロセンノウが鮮やかな緋色の花を見せてくれたりした。ほかにも名前のわからないものがいくつもあり、もうちょっと名前がわかればいいのになど感じてしまう。また、ほんの小さな沢の中にもアマゴが泳いでいたり、木々の間からは何種類もの鳥の声が聞こえてきたりした。

毎年、季節を変え、設楽の山に地質調査に入っているわけだが、季節ごとにいろいろな自然を見させてもらっている。やはり植林の山より、植林ができないような険しい地形のところのほうが、生物の種類は多いように感じる。広葉樹を生産者とする食物連鎖の広がり大きさの表れのようなのだ。しかし、残念なことにどんなに険しい山の中でも、人間の出したゴミがたいてい落ちていてる。山仕事の人のゴミではないようなものが多い。それが、自然に対してどのような影響を与えるかはわからないが、自然の中にゴミを捨てていく人間の気持ちを嫌だなと感じる。人間も自然の一部であると思えば、こんなことはないのではないかと感じている。





私のフィールド猪高緑地

堀田 守

名古屋市は、名東区にある私のフィールド猪高緑地を紹介します。地下鉄東山線「本郷」駅より市バスで約15分の所に位置し、東名高速「名古屋IC」に面した南側に雑木林に囲まれた緑地帯があります。通称「猪高緑地」と呼ばれています。

東側は長久手町に接し、北東側は東名高速道路、南側は日進町、西側は名古屋市名東区の市街地となっています。

この地は、歴史も古く、大昔は高針（高針古墳）で縄文時代の矢じりが作られていたのではないかとされています。

又、室町時代には、柴田勝家が下社村（現在の東一社）で生まれた記録もあるそうです。

現在の「猪高」の地名は、明治39年に猪子石村と高社村が合併し猪高村となり、昭和30年名古屋市に合併され千種区猪高町となり、昭和50年に新区として現在の名東区となりました。周辺が開発されていく中で、ここだけは、都市計画で緑地が残されています。

緑地内には、溜池が数カ所あります。中でも一番大きな池が「塚ノ杵池」と呼ばれています。溜池の周りには、水田や畑、雑木林があり、一部は休耕田で放置され荒れ地となり、「たんぼの原風景」も見ても無残な姿に変化しつつあります。そうした手つかずの自然放牧場所には、いろいろな昆虫類・生物がいます。まさに街の中の「自然の宝庫」と呼ぶにふさわしい場所と思っています。

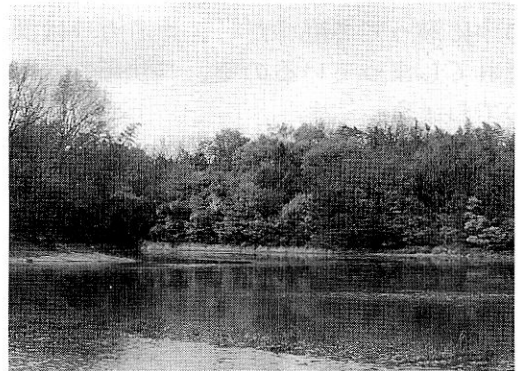
動物では、タヌキ・イタチもまだ棲みついているようです。（タヌキをH6.5/22夕方目撃）そのほかに、トウキョウサンショウウオ・ヘビ（アダ・イソウ・ヤマカシ・シマヘビ・他）・カエル（ニホアカガエル・ヒキガエル・トナリガエル・アマガエル・他）、春の七草より始まり、初秋のオオナンバンギセル・オミナエシ等いろいろな草花、ジュン

サイ・ガガブタ・コモウセンゴケ・ミミカキグサ等の、池・湿地の植物も見られます。

いつでもいろいろな季節に、草花・樹木の変化が見られ、昆虫・鳥等、自然との接点の観察ができ、自然のすばらしさを自分なりに満喫しています。又、名古屋支部主催の観覧会も毎年3/21と9/15に定期的に行われています。自分なりの観察眼を持って参加されたみなさんは、「名古屋でも自然が残っている所ですね！」と感想を言って帰られます。みなさんのフィールドとの違いを見つけてみませんか？

都合がつけば、いつでも案内致します。

連絡先（20時以降）052-774-1196
名古屋支部 堀田 守 まで



塚ノ杵池（93.11）



猪高観覧コース入口（94.1）



山崎川ウォッチング(4)

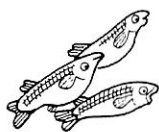
— 宵の狩人『アオサギ』 —

白木 幹司

この写真は、1月11日(火)午後3時頃、昭和区折戸町の折戸橋の10mほど下にある江戸時代頃の木の橋の丸太の橋脚の切株(?)です。縦横4本ずつ計16本が、道路と食い違った所に残っていて、出水の度にゴミを引っかけて、山崎川で一番醜い姿をさらしています。

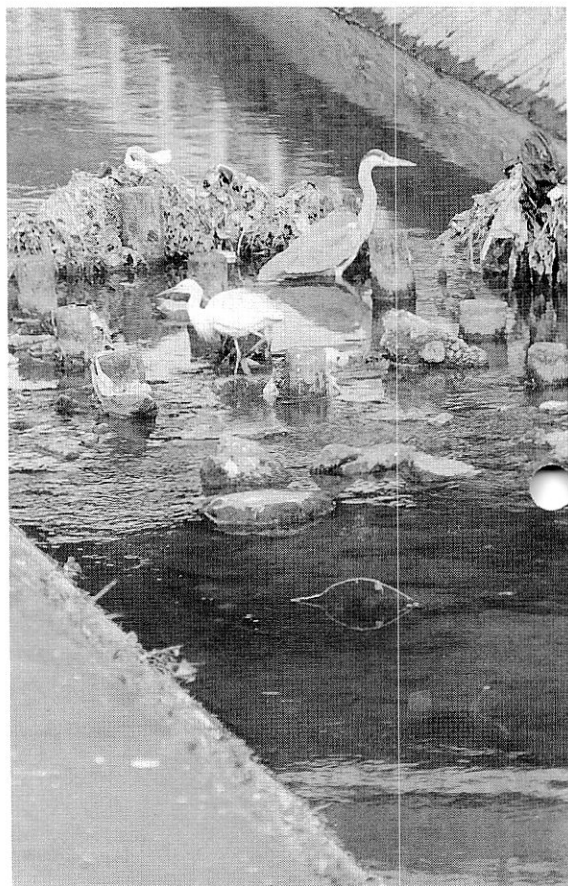
ところが、この杭のおかげで川底が深くえぐられて、オイカワ・コイ・フナの稚魚の絶好の隠れ家となっているようです。

そこで、この冬の不漁の時期に、珍しくアオサギが一羽、わざわざ騒々しい街中へ飛来して、早々と場所取りをしています。直立不動で夕暮れを待っているその周りを、縄張り意識の強いコサギが威嚇の姿勢で回っています。「そんな暇があったら、自分で努力しろよ」と言いたいのですが、冬はドジョウは泥の中に潜って冬眠中だし、オイカワは深みに隠れてしまっているのです、コサギも気になるのでしょうか。



それにしても、人間が川を直線化して川底を平坦にならしてしまったため、ゴミと杭が魚たちの生活を守り、山林に棲むアオサギが、餌を求めて自然豊かな筈の森から都会に出撃するなんて、どうなっているのでしょうか。

この春からの雨不足で、ケイ藻類が増殖し、魚たちが減って、サギもカワセミもほとんど姿を現さない毎日です。ウスバキトンボの数ばかり、やたらと目立っています。風のせいか、みんな川下を向いて元気よく群れ飛んでいます。ギンヤンマを見ていないのは私の慢かも知れません。



宵の狩人『アオサギ』(94.1)

私のフィールド

小牧市 荒川欽松

私の住むところは小牧市の東部で、裏の方の山を越えれば明治村と入鹿池があります。自宅は部落の南端にあり、南は水田、東の方は明治村に行く道路になっています。北は山裾に沿って林があつたり農業用溜池やミカン畑があり、西は水田地帯の農業地帯です。

毎月1回、休みの日に家の周辺を約1時間半掛けて野鳥を見ながら記録しており、もう十数年になりますが、そろそろ、記録をまとめたいと思っていますが、未だまとまていません。

周辺で観察できる野鳥は、ありきたりのものばかりで、あまり珍しいものは観察されていませんが、水田地帯にはケリとヒバリが周年生息しています。しかし、ここ数年、繁殖が悪くなってきていますがそれは最近とみにカラス類が多くなり、冬場、ときには200羽程も水田で採餌していることがあり、彼らが卵や幼鳥を襲うからではないかと思われま

す。春になると、ヒバリが空高く舞い上がり素晴らしい歌を聞かせてくれたり、初夏になると、セッカがヒッヒッヒッ、オオヨシキリがギョギョッシ、ギョギョッシと鳴き、夜になるとタマシギやヒクイナの鳴き声が聞かれます。昨年までセッカは2～3番（つがい）繁殖していましたが、今年は1番しか見られなく、オオヨシキリは休耕田に葦が生えていた頃、鳴き声を聞くことができましたが、耕地整理が済んだ以後、葦が無くなり、見かけることは少なくなりました。

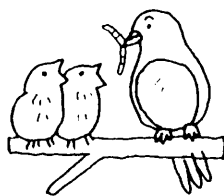
サギ類も数年前までは、コサギ・アマサギ等が夏になると数多く水田に来ていましたが、コロニーが遠くへ移動したのか、最近はほとんど見られなくなりました。

秋、9月半ばを過ぎると、ヒヨドリは西南

方向に群れになって飛んで行きます。冬はカモが普通見られるものですが、近くの溜池にはほとんど入りません。そのわけは、葦がほとんど生えていないため隠れる処が無いからだと思います。正月過ぎるとツグミがやって来ます。しかし、山に餌が豊富にあるかどうかで、時期が早かったり、遅かったりします。

このように環境が変化すると、野鳥にも変化が出てきます。以前、東にある小山では、5月頃トラツグミが鳴いていましたが、下草が刈られてスッキリしてから声は聞かれなくなってしまったし、草原だった処に灌木が生えて大きくなってきたらホオジロが減ってきたり・・・、十数年前からすると、数・種類ともに減ってきていることをはっきりと感

じることができます。こうして見ていますと、平凡ながら個々には少しづつですが変化してきていることが見られますので、今後も環境の変化などと野鳥の関係に注意していきたいと思っています。



東三河 間瀬美子

わが勤務校、豊橋市立福岡小の校地は滅法広い。運動場だけを見ても、200mのトラックと100mのトラックを取ってまだおつりが来るくらいだ。その昔には北側の境界沿いに100mの直線コースが常設してあったそうだ。

広いだけに木も多い。校庭のまわりは巨木の列で囲まれ、植え込み・築山の類もあちこちにある。

もと100mコースがあった側には、50本余りのクロマツと20本程のクスノキが混合林を作っている。マツは、昭和の初め、学校がここへ移転して来た頃、防風林として植えたものだそうだ。それから六十数年、苗木の年齢を加えても樹齢は70年になるかどうかと思われるが、樹高15m以上(?)、幹回り1.5~2mと、なかなか堂々たるものである。



クスノキは、マツ以前からあったらしいが、これもマツに劣らぬ偉容を示し、最も太いものでは幹回り3mに近い。

「あれは、オレ達が植えた木だ。」「オレが子供の頃はせいぜい2~3mだったがあ」と、校区の人々の愛着も強く、念入りに手入れされている甲斐もあってか、マツクイムシにも侵されず、毎年勢いよく新芽を吹いている。

5~60年前は昼も暗いような松林がどこにでもあったが、今は瓦葺きやらコンクリト建てがニョキニョキ生え、地面を覆い尽くしている。学校の松林は、もしかしたら昔の面影を残す非常に貴重なものになってしまったのかも知れない。



豊橋市立福岡小学校の貴重な松林・・校区の人たちの愛着も強い



ライトトラップに集まる昆虫

名古屋市 水野利彦

今年の乾燥は、どこへ行っても開いた口が塞がらないようなひどい状態です。春（5月中旬）までは適度な湿り気があり、ライトトラップにも例年以上の蛾が集まってきましたが、6月からは集まる蛾の数が減少してきました。仕事の都合で6月初めからライトトラップを使う機会が減ってしまいましたが、それでも行く度に余りにも悲惨な状況が続き、シッポを巻いて帰って来ることが度重なっています。

ライトトラップに集まる昆虫は、当日の気温と湿度に左右されます。気温の影響が大きいことは昆虫が変温動物であることから容易に理解できますが、湿度に対して結構敏感なことには驚かされます。

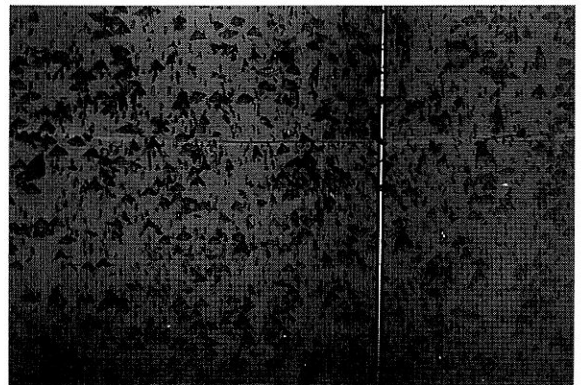
砂漠の動物が1年に数度のスコールの後に一斉に活動を始めることはご存知でしょうが、日本のように雨の多い地域でもそれを彷彿させるような状況が見られます。事実、雨が上がった直後や霧雨が降り続くような蒸し暑い条件下では、驚くほど多くの昆虫（時期にもよりますが、蛾のほかにユスリカやハネアリが中心になります）がトラップに誘引されます。1.5m四方の白幕が昆虫で覆い尽くされてしまうだけでなく、ライトの周りを飛び交う昆虫で渦ができることもあります。こんなときは、トラップを仕掛けた当人でさえも近づくことが困難になってしまいますし、お目当ての蛾を見つけても、他の昆虫に邪魔されて見失うこともしばしばです。昆虫が集まってくれることはたいへん嬉しいのですが、やっと見つけた蛾が他の昆虫にぶつかってどこかへ飛んで行ってしまうことには閉口してしまいます。でも、こんな条件は数年に1度あるかないかなので、文句を言いつつもつつい口元がほころんでしまいます。



さて、今年のように暑く乾いた年にはライトトラップは諦めるべきなのでしょうが、こんなときは少しでも湿度の高い場所、たとえばうっそうとした森林の中や川のほとりの林など、を探して出かけています。ライトトラップに20kgの発電機を使う関係で車が入れる所になってしまいましたが、比較的雨の多い三重県南部へ足を運ぶ機会が増えています。この地域の照葉樹林は、東海よりもかなりモコモコした感じでいかにも南を感じさせますし、昆虫も東海と違った種類が多く、トラップを見る目がいつも以上に輝いてしまいます。

代表的な昆虫を挙げてみると、東海では減少したウスイロキシタバやこの地方が北限となるヤクシマヒメキシタバ・サツマスズメといった蛾類や、ミカドアゲハ・イシガキチョウやサツマシジミ・ルーミスジミなどの蝶類、緑に輝くオオセンチコガネという甲虫類などが見られます。

名古屋から有料道路を使って3時間余りの距離ですから、日帰りもじゅうぶん可能です。ちょっと足を延ばして、少し変わった地域の自然を満喫してみることも楽しいでしょう。



大塔溪谷でのライトトラップ (89.7.1)



春日井の今の学校からは、道樹山は目の前にあるし、少年自然の家は歩いてすぐです。

豊かな自然と口にはするものの、具体的にはどうしたことなのか。自然はどんどん姿を変えていきます。記録として残さなければという気持ちはあるのですが、教育の現場は想像以上に忙しく、字のごとく心を亡くしているというのが現状です。ましてや、運動部など担当しているともうだめ。数年前やっと科学クラブを新設し、顧問になれました。ところが、タンポポ調査や団地内のツバメの分布とかを行ってもなかなか足を使ってやり抜かせることが難しいのです。マツバウンランの盛況から衰退なども結局記録できずじまいになってしまいました。やっと、目の前の空き地でヒバリの飛んでいる高さの測定ができたくらいです。



今は、釣りの好きな生徒に、しきりに水生昆虫の調査をしようと声をかけている最中です。だんだんサボるために入部してくる生徒も増えてきて難しいのですが、何とかそうした生徒にも何かをつかませてやりたいものだと思います。すぐ形に現れる工作作りやコンピュータの入力などは結構やりたがるのですが、どうしても地道な観察などは避けたがる生徒が増えてきているので、今年は授業で付き合っている生徒からの自然情報を『理科通信』という形で返しています。

ツバメの子を育てた生徒、コゲラやキビキなどの死体を持ち込んできた生徒、側溝でカワゲラを見つけた生徒etc. そんな話題を生徒達に提供しています。そして、自分自身とは言えば、どうにも身動きができないときは、通勤の景色から見える分離帯や街路樹の植え込みの植物の変化を確認して季節の変化を確かめるのがやっと、という今日この頃です。

理科通信

(一部を抜粋)

NO. 2 1994. 4. 21

春日井市立高森台中学校1年理科

〈宿泊学習ハイキングコースを歩く〉

【ギフチョウ】

16日(土)にハイキングコースを決めるため、長縄先生と自然の家のコースをいろいろ歩き回りました。最初の予定のコースがあまりにも早く歩き終わってしまうので、あっちへ行きこっちへ歩いてやっと決めることができました。その時の、いくつかの印象を書いてみます。コースを歩いていて、一番感激だったのは、ギフチョウに4度出会ったことでした。ひょっとして、1・2度は同じ個体だったかもしれませんが。長縄先生いわく、「トラの縞模様のように、黒と黄色のコントラストがきれいだね。」さすが、美術の教師。図1がそのギフチョウです。はねを開くと、約5cmでアゲハチョウを小型にしたような感じです。

図1



ギフチョウ



毎月第1日曜日 9時～11時30分 集合場所 植物園北門前（小雨実施）
来年（1995年）は、2月から始めます。連絡先 05613-8-2792 鬼頭

11月 6日（日） くもり一時雨

参加者 中島さん、上等さん、青木さん、羽賀さんご夫婦（尾張旭市）、
加藤さん・立松さん・三浦さん（瀬戸市）

駐車場から北門への道を歩いていると、ヤマガラが道ばたの草むらへ降りてきたり、カケスが道に落ちている？をついばんで飛び去ったりするのに出会いました。植物園に入るとカケスが5～6羽の群れで動いていました。冬が近づいてきて鳥たちの動きがこれまでと少しちがってきたようです。ふるさとの森の方でツグミのカッカッカッという声を聞きました。暖かい秋とはいふものの、自然の大きな流れは休みなく動いていることを感じさせられます。

岩本池の水位は、9月の台風の時と変わりばえしませんでした（満水時の1～2割程度）が、渡り鳥（オナガガモ・コガモ・ハシビロガモ・マガモ）が30数羽、水浴びをしたり餌を取ったりしていました。生き物が水面にいと池も違った顔を見せてくれるようです。岸では、アオサギが獲物に狙いを付け、彫像のように立っていました。早魃の生き残りの魚はいったいどれほどいるのでしょうか。

今年の2月から森林公園で観察会を始めて、早いもので10回を数えました。毎回新たな発見がありました。

友の会と一般の参加は、のべ36人でした。この間、自然物からも、参加者からも多くのことを学ぶことができました。

自然と友だちになれる人を、観察会の輪を広げて、少しずつ増やしていきたいと思います。

支部の仲間と一緒に観察会を始めようではありませんか。

一月八日の支部総会に参加して話し合ひましょう。

ヤマハゼやカキの色づいた葉がきれいでした。カキの葉のあの微妙な色のバランスはどのようにして出てくるのでしょうか。絵に描く対象としてもおもしろいと思います。サクラの葉は虫に荒らされているものがほとんどです。幼虫の姿はすでになく正体はつかめませんでした。サナギは土の中でこの冬を越すのでしょうか、土から這い出てくる姿が見たいものです。

湿地のコモウセンゴケは、色もよく粘液もいっぱい分泌していて元気に見えました。顔を近づけてみると丸いものが真ん中にあります。花芽かな？と思って他のも見ると穂がすつくと立って今にもピンクの花を咲かせようとしているものが目につきました。近いうちに咲きそうです。植物は気候や環境の変化に目敏く適応してきたことを思わせます。

事務局から

〔内容〕

- ・ 研修会は、自然観察の指導テーマの実習的なもの10回位と自然観察会の運営に関する

。環境教育に関して、協議会がネットワークづくりの核となる必要があるとか、学校の教師を対象に講座（自然観察的なもの）を行ってはどうかという意見があり、「環境教育に関する会」（仮称）を作る方向で検討することとなった。とりあえず、鬼頭・篠田・東・山田を発起人として内容等を検討する。

愛知県土木部勤務の加藤宜機氏を講師として、河川法の目的、河川管理の方向等について研修を行った。（内容：別ページ）

布谷さんのお話の要点は、自然観察会では、自然が好きだという人、雑木林を歩く

と楽しいという人を少しでも増やすのが目的であるが、そこへ至る道は多様であり、自分に合った観察会の方法を見つける必要があるということであった。また、指導する者が自然を大切に思う気持ちは自ずと相手に伝わるものであり、日頃からそうした態度を身につけておくことも大切とのことであった。

意見交換では、自然観察会は楽しいものでなくてはならないとする意見が多かったが、一方それが自然保護とどのように関わっていくのかという問題意識を誰もが持っているように見受けられた。

★ 視察研修会（八島湿原等）

〔期日〕平成6年8月20～21日（出席9名）

〔場所〕八島ヶ原湿原・車山湿原（霧ヶ峰）

入笠湿原 一長野県一

〔状況〕

20日に訪れた八島ヶ原湿原（43.2ha、標高1,630m）は、かなりの賑わいで、自然に親しむ人々が多くなったことを示していた。始めにオミナエシの鮮やかな色に感嘆し、その後湿原周辺に咲くハクサンフウロ・アサマフウロ・マツムシソウ・シシウド・トモエシオガマ・ヤナギラン・ハンゴンソウなどの花を楽しんだ。

車山周辺で宿に泊まった次の日の朝は、車山湿原（8.3ha、標高1,760m）に入った。見られる植物は、八島ヶ原とほぼ同じであったが、ともに湿原そのものには網が張ってあり中に入れないのは、やや残念であった。多くの人を楽しんだらうことと、湿原の保護は両立しないため止むを得ない措置である。

午後は、入笠山に車で上がり、入笠湿原（1.85ha、標高1,730m）を観賞した。小さな湿原をアケボノソウ・サワギキョウ・クサレダマなどの花を見ながら一周した。

天気には恵まれずよく雨が降ったが、観

察の間だけは雨が全く降らなかったのは、さすが日頃の行いの善い者達の集まりであると自画自賛したのだが、事実はどうか。

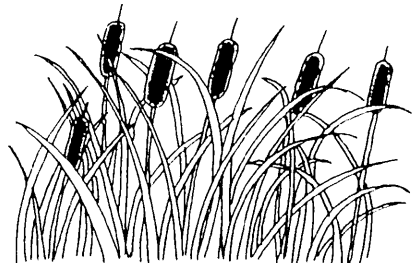
★ 「環境教育に関する会」（仮称）の

参加者募集

普及部会の項でも触れましたように、環境教育については全県的な組織もなく、何らかのネットワークが必要となってくると考えられ、協議会としても今から取り組んでおく必要があると思えます。また、この春実施した学校教師に対するアンケートでも、協議会に環境教育に関する各種情報や教育方法の提供を求める意見が多くありました。

このため、協議会に「環境教育に関する会」を置いていろいろな検討をしたいと思っています。環境教育の対象からみて、社会教育と学校教育に分けることができ、当面どちらへ向かうかなども今後検討していく予定です。

とりあえず一度打合会を行って検討したいと考えていますので、環境教育に関心のある方は山田博一さん（0574-65-1541）までご連絡ください。



協議会の行事案内

☆ 自然観察指導研究会

テーマ 「各支部の特徴と指導方法」

日時 1月16日(月)振替休日 午後1:30~4:30

場所 愛知県中小企業センター(中村区名駅) TEL(052)561-4121
7F第12会議室 *各支部からの発表があります。

☆ 環境教育を考える会

日時 2月11日(土) 午後1:30~5:00

場所 名古屋市教育館(中区錦三丁目) TEL(052)961-2541
第7研修室 *意見交換会

☆ 講座研修会

テーマ 「林業と山村について」

日時 2月19日(日) 午後1:30~4:30

場所 名古屋市教育館(中区錦三丁目) TEL(052)961-2541
第7研修室

講師 愛知県林務課職員

☆ フォローアップ研修会(NACS-Jと共催)

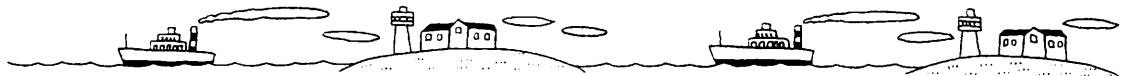
日時 3月11日(土)~12日(日) 午後1:00~

場所 犬山ユースホステル TEL(0568)61-1800

講師 青柳昌宏(NACS-J事務局長)ほか

☆ 総会は3月26日(日)午後の予定

問い合わせ、参加申込みは事務局の佐藤国彦さん TEL(05617)3-5674まで



☆ 編集後記 ☆

★ 去年は暑い暑い夏がずっと続きました。地球が一生懸命に公転して、やっとのことで地軸が大きく傾いて、「太陽の光が柔らかくなった!」と思った頃には、もう北風が吹いていました。

★ 猛暑から初冬にかけて、多くの方から原稿をいただきました。ありがとうございました。仕事の隙をつなぎつなぎして、ようやくのこと協議会ニュースを発行することができました。長期にわたり、ご心配をおかけしてすみませんでした。

★ いただいた原稿は、どれも長い年月の結晶でありました。この協議会ニュースは、時こそ越えてはいますが、みなさんの苦勞と信念の集合した重みのあるものとなりました。

ゆっくりとご覧いただければ、と思います。

★ 原稿送付先

編集部会 〒491-02 一宮市奥町内込47-4 伏屋光信 ☎0586-61-4132

